
講 演：分科会B

オーストラリアの社会・生活を教えるには —— 映像を使つての教授法 ——

オーストラリア映画に描かれたアボリジナル像

—— 歴史的・政治的背景を探求するためのオーストラリア映画利用について ——

ケイト・ダリアンスミス

メルボルン大学

過去十年以上、私は様々なオーストラリア人および北米、ヨーロッパ、そしてアジアからの外国人学生を対象としたオーストラリア研究の大学教育に携わっている。大学院生の中には、オーストラリア文化についての分析に新鮮かつ興味深い比較観点を提示する外国人学生もいる。これらの学生全員が、オーストラリア社会の中で我々が広く、幾分控えめな言い方ではあるが「先住民問題」と呼んでいるものに非常に興味を抱いていることは間違いない。学生達の興味は、彼らがオーストラリアに来る以前に形成されたオーストラリア先住民のイメージから生じている場合が多く、それらは観光用宣伝文句、アボリジニ芸術の巡回展、またはオーストラリアの長編映画やテレビドキュメンタリーなどから得た知識を寄せ集めたものである。

私が外国人学生を対象に行ったクラス調査では、彼等のオーストラリア先住民に対する前知識は、二つのむしろ無関係なイメージが中心であるという事がわかった。第一は、アボリジニ・コミュニティが都市の外側、通常半砂漠地帯にあり、オーストラリアにおけるヨーロッパ人の入植によっても変わらない精神的、物質的生活を追求しているという“伝統的”アボリジニ文化のイメージである。第二のイメージは、土地の権利、人権、および白人コミュニティとの和解に関する様々な課題とともに、衛生、投獄、および教育機会に伴う深刻な社会問題など、現代社会においてアボリジニ・コミュニティが直面する困難な問題を強調する。双方のイメージは、ヨーロッパ啓蒙主義および人類学的観察の“高潔な未開人”としての役割、またはヨーロッパ占領による白人優位主義の受動的“被害者”としての役割のど

ちらかを担うアボリジニという、幾分ステレオタイプな観念に基づいている。我々が問うべき問題は、教師として、いかに学生がこれらの多様な、そしてしばしば矛盾した彼等のオーストラリア先住民に関する断片的知識の理解を助けられるかということである。

これは、私自身だけでなく、外国人とオーストラリア人学生の混合からなるクラスを教えている私のオーストラリアの同僚にとっても、やりがいのある課題である。そして、私はオーストラリア人学生が必ずしも、彼等の同級の外国人学生より、先住民問題について良く知っているとは限らないことを重視したい。しかし、もちろんこれは、オーストラリア先住民についての課程を教える日本の私の同僚にとっての課題でもある。私がこの興味深い問題を解決するために用いている教育的戦術、およびカリキュラムを生産的に（また刺激的に）豊かにするため、いかに先住民問題を扱った映画を編成することができるかということを皆様にお教えしたい。

三つの徹底的かつ意欲的な目的をもつ“オーストラリア映画に描かれたアボリジナル像”と題したモジュールを最近改訂した。

- いかにして植民地政策の名残がオーストラリア先住民の現在の政治的、法的、社会的、および文化的状況を形作ったかを、学生が評価出来るようにするために、彼等に歴史的背景を教えること。
- 歴史的にも現在の生活においても、先住民の経験の多様性を強調すること。
- オーストラリア先住民の研究は、すべて非先住民社会の研究でもあるということを理解し、そして二つのグループの関係、ならびに先住民の“管理”における政府の政策および実施を支えるイデオロギーを探求すること。

映画の即時性および視覚性は、学生の関心を引き、そして特殊な歴史的、近代的事象の背景に関する幅広い議論と説明のきっかけとなることにより、優れたツールを提供する。物語を語り我々の世界観を変え、別の時空を我々に運び、そして共感または嫌悪の反応を導き出す映画の能力は、もちろん、このメディアが特に効果的である理由の一端である。オーストラリアに親しみのない観客にとっても特典がある。映画は、未開墾地と都市というオーストラリアの風景を画面に映し出し、演技の中にオーストラリア・アクセントを運び込み、視覚的聴覚的側面を提示してくれる。

“オーストラリア映画に描かれたアボリジナル像”という私のモジュールにおいて、先住民と入植者の歴史および文化の側面を描き出した様々な脚本を選び出した。それぞれの映画上映の前に、映画の主要テーマ、映画の物語および登場人物の背景、および映画の製作履歴についての詳細など、簡単な概括を行う。オーストラリア映画産業は長い歴史を持っており、少なくとも1970年代の“リバイバル”から、政府助成を受け、オーストラリア人が彼等の

国家的文化をどのように捉えているかに密接に関わってきている。このため、アボリジニのテーマおよび体験を扱ったオーストラリア長編映画を検証すれば、非先住民のオーストラリア先住民に対する態度が時間を追っていかに変化したかについての洞察を示してくれる。

先住民問題について製作された多くのオーストラリア映画が彼等の現代社会を探究しようとする一方で、過去や、含蓄的に、現代の聴衆との関わりを検証する歴史的映画が最近では多くなっている。オーストラリアおよびその他の地域で商業的にもまた批評においても成功を収めた Phillip Noyce の *Rabbit Proof Fence* (2002年) は、オーストラリア西部 Pilbara の Mardudjara の少女3人の物語である。彼女らは政府によって強制的に家族から引き離され、1,500 マイル離れた Moore 川の先住民居留地に移される。少女達は逃げだし、ウサギよけフェンスをつたって歩いていき、ついに彼女らの家までの道を見いだす。*Rabbit Proof Fence* は、アボリジニの民族性、そして実は英雄的概念がオーストラリアではどのように捉えられているかを伝えるという点で、重要である。この作品は、“盗まれた世代” および同化政策の遺物を文章化した「家庭に帰そう」と呼ばれる人権・機会均等委員会の報告書が1997年に発表された後に製作された。報告書は、オーストラリア国内において、裁判所など公共の場で多くの議論を巻き起こした。*Rabbit-Proof Fence* は、文書とはまったく違った方法で、これらの公の議論に不意の叫び声をあげた。

Rabbit-Proof Fence は、私の指導モジュールにおいて検証された映画の一つであり、当然の選択であった。この映画は、ハリウッドの監督によって製作されたが、同時に極めてオーストラリア的なストーリーであり、逆境に立ち向かう勇気を描写する点において普遍的である。私が選んだ他のすべての映画と同様に、これは、学生からの疑問を引き出し、興味を喚起し、さらなる検証および反応へと導く映画である。次にあげるのは、現代オーストラリアそのものである歴史、文化および政治的背景の複雑性について広く理解するきっかけとなるよう、映画がどのように描かれるのかということをつ分らせてくれる例である。

Jedda (1955年)

Jedda は、オーストラリア映画の歴史において、古典であり、まさに基礎となる映画である。優れた映画製作者である Charles Chauvel によって1955年に制作されたこの映画は、多くの“初めて”を誇りとする。例えば、オーストラリアで初めて製作されたカラー映画であり、素人のアボリジニ俳優を主演にした初めての映画であり、権威あるカンヌ映画祭に出品された初めてのオーストラリア映画である。これは制作当時、問題作となったが、自身の文化から隔離されたアボリジニの少女というテーマ、およびこれにより彼女の中に引き起こされる葛藤は、未だ今日の問題である。

ストーリーの舞台は、辺境の北部特別地域。白人女性 Sarah McCann は、自分の子供を亡くし、アボリジニの少女 Jedda を養女に迎える。Jedda は、McCanne の大牧羊場で育つ。

彼女は、白人教育を受け、彼女自身のアボリジニの伝統や人々からは隔離されている。Marbuck というアボリジニの男が仕事を求めて牧場にやって来ると、Jedda は彼に惹かれる。Marbuck は Jedda を誘拐し、彼女を彼とともに彼の種族の土地に連れて行き、Jedda の“白人の家族”に追われる身となる。しかし、Jedda をさらうことにより、Marbuck は彼の種族の伝統的法律を破ってしまう。結局、状況に耐えきれず、Marbuck は Jedda を道連れに、崖から投身自殺をはかる。

Jedda は非常に視覚的な映画であり、物語の進展がはっきりとしている（オーストラリアのアクセントを理解するのは、正直なところ困難ではあるが）。これは、1950年代を背景としたアボリジニと入植者の関係を描き、そこに見られる社会は、明らかに過去のものである。そして、映画の多くのシーンに人類学的特性が表れている。*Jedda* は、“盗まれた世代”の問題、アボリジニの子供を彼等の文化から隔離すること、そして伝統的アボリジニの法と辺境オーストラリアにおける牧羊産業のアボリジニ文化への影響の問題など、教室で探求しうる多くの問題を提起する。

Jedda の内面の苦悩を描いたシーンを二箇所紹介する。

映画の一部上映

最初に、Jedda が、白人教育の象徴であるピアノの練習をしている。しかし、彼女の視線は、壁に飾られたアボリジニの盾に度々惹きつけられ、弾き間違える。彼女は、牧場で働くアボリジニの混血の牧夫 Joe とともに乗馬に出かける。このシーンで、彼女は Marbuck に初めて出会う。

第二のシーンでは、Jedda がテント（これも白人文化の象徴）の中で眠っているが、Marbuck が伝統的な歌を歌い、彼女は外に誘い出される。ここでも、二つの文化の間で苦悩する彼女の困惑がはっきりとわかる。

The Last Wave (1977年)

これは、*Picnic at Hanging Rock* (1975年) を完成させた直後の Peter Weir の監督作品であり、ある意味で興味深い映画である。Weir の目的は、場所の独自性を示した、オーストラリア独特の映画を製作することであった。この映画において、まるでそれがヨーロッパ人には馴染まないかのように、白人には風景や場所への強い不安感がある。ストーリーには、儀礼的殺害の嫌疑をかけられる5人のアボリジニ男性を弁護する中堅の弁護士が登場する。裁判は、シドニーの摩天楼と発展、そして降り続く雨の中で行われる。アボリジニは、Redfern の郊外の中心部から地下の洞窟に至るまで、シドニーに生息している。アボリジニ文化は近代都市の下にある。これは、オーストラリア文化の価値および精神性について、

地勢の歴史の積み重ねについて、そしてオーストラリアの非先住民と先住民の間にある格差についての疑問を提起する映画である。そしてそれは、映画製作当時の1970年代にのみならず、現代の問題でもある。

The Last Wave は、白人弁護士と彼の世界を中心に展開する。この映画は、白人の観点からアボリジニの民族性を見つめ、非先住民の人々がアボリジニの精神性について抱くファンタジーを探求する。学生と話し合うのに特に有効なのはこの最後の点であり、それは一般的には、オーストラリアの“ニューエイジ”の精神性および信仰のさらに広汎な分野に分類されることができる。それにより、アボリジニが怖れる場所に関して、オーストラリアで起きている文化的論争の問題の調査も開始される。*The Last Wave* の一部を上映する時間はないが、じっくりと視聴する価値のある映画である。

***Beneath Clouds* (2002年)**

アボリジニの映画製作者 Ivan Sen が監督した *Beneath Clouds* は、セリフがほとんどなく（この点で、英語を母国語としない学生には理想的な映画となっている）、印象的な映像を持つ、荒涼とした物語である。これは、バス停で出会い海岸地方に向かって旅をする二人のアボリジニ・ティーンエイジャーの物語である。Lena は、彼女がアボリジニの母とアル中の継父と暮らしていた内陸部の町の生活から逃げ出して来た。彼女は、アイルランド出身の本当の父親を探し始める。Vaughan は、セキュリティの甘い刑務所の若い囚人である。彼の母が危篤だと聞き、これが彼の脱走の引き金となるが、彼は特に行くあてもなく旅をする。これは、疎外感と無目的について、またそこから立ち直るしたたかさについての映画でもある。旅の手段、およびロード・ムービーの形式によって、Vaughan と Lena は、お互いと、そして彼等が旅の途中で巡り会う良い人と悪い人、黒人と白人という一連の登場人物と対峙していくことが出来る。

私がこれから見せる一場面は、アボリジニの若者達と警官の間の殺伐とした対立を描いている。Lena と Vaughan は、Vaughan の友達数名と老女とともに、車に同乗することを了解した。彼等は、車で断崖を通り過ぎるが、ここは映画の前半で、白人の入植者がアボリジニを虐殺した歴史的な場所として描かれている。老女と Lena は、この負の遺産を無言で認識する。

車は、警察によって止められ、若者達（特に刑務所から脱走した Vaughan）に緊張が走る。通常の運転免許証チェックだったものが、Vaughan が質問に答えることを拒否し、人種差別主義者の白人警官に蔑称である“boy”という言葉で話しかけられたことにより、暴力へとエスカレートする。

映画の一部上映

これは、Beneath Clouds の主要テーマの一つである人種差別的対立を示す過激なシーンである。しかし、映画の物語は、オーストラリアの先住民と非先住民の間には別の種類の関係が存在するということが強調している。つまり、お互いを尊重し、人種の格差を超えて認め合う兆しもあるということである。Beneath Clouds は、人種政策および自己認識（Lena はアボリジニのハーフであるが、白人と見なされる）、オーストラリアの田舎での若いアボリジニ達の経験、警察とアボリジニ（映画で示されるように平面的でなく、はるかに根の深い話題）、家族や親であることの意味、そしてすべてのオーストラリア人が場所や土地に持つ精神的繋がりについて、議論のきっかけとなる可能性を持っている。また、この映画は、アボリジニの“声”、そして舞台芸術ならびに現在は映画におけるアボリジニ創作作品の“ニュー・ウェーブ”を浮かび上がらせている。

* * * *

「オーストラリア先住民映画上映」というモジュールでは、各映画上映の後討論が行われる。

これらのフォーラムでは、学生は時にはグループで活動し、上映に先立って私が考え、出題した問題に答える。また、彼等は特定の登場人物と自分を重ね合わせ、登場人物の視点を表現する小論文を書くよう勧められることもある。このプロセスでは、他の文書化された情報源に対して映画の歴史的背景を一致させたり、時としてドキュメンタリー素材を見せたりすることもある。

オーストラリア先住民（そしてその他のトピックスも同様）についての多くのオーストラリア・ドキュメンタリーは、オーストラリア人視聴者を念頭に制作されており、外国人学生には詳細すぎることも多々ある。私は、一時間のプログラムをすべて見せるより、ドキュメンタリーの一部を見せ、口頭のコメントによって状況を説明するのが、最も効果的であるということがわかった。教室で非常に役立つ、優れたドキュメンタリーがいくつかある。秀作の一例は、“Mabo: Life of an Island Man (1997年)”というドキュメンタリーで、これは土地の権利法に関する重要な法的変遷の背景を描いている。

しかし、優れたドキュメンタリー教材がいくつかあるにもかかわらず、外国人学生を対象とした授業では、長編映画をじっくり鑑賞することを私は選択している。情報を伝える必要性によって作られる多くのドキュメンタリーとは反対に、ストーリーを語る長編映画の推進力は、学生が一層物語に惹きつけられることを意味しているからである。そして、オースト

ラリア人と外国人視聴者双方にとって、オーストラリア先住民と非先住民の関係の広汎な政治的、歴史的、および文化的側面が、新しい創造的な、また適切な方法で明らかにされていくのは、*Jedda* や *Beneath Clouds* のような映画的な物語、ならびに映画脚本における登場人物の成長を通してである。